

イーディス・ウォートンの小説

— *The Custom of the Country* —

石 本 キ

イーディス・ウォートン (Edith Wharton) は「小説作法」(*The Writing of Fiction*) の中で小説を分類して風俗習慣を扱ったものと、性格或は心理を扱ったもの、そして冒険的事件を扱ったものと三つに大別し、現代の小説はこの三つの中一つ或は二つの部類に属するものが多く、冒険小説は既に現代のものではなくなった。現代人は人間そのものに対する興味をより多く持つからであるという意味の事を書いている。彼女自身専らはじめの二つの部類に属するような風俗、習慣乃至心理、性格を扱った小説を多く書いている。今筆者が風俗小説家としてのウォートン夫人を考えて見たいのは彼女が精通していたニューヨークの上流社会にセティングを置いた短篇小説、長篇小説が数多くある中に、ある特定の時代のニューヨークの歴史として彼女が特に丹念に習俗を記録した三つの長篇小説があるからである。

それは

- (1) 一九〇五年発表の *The House of Mirth*

(2) 一九一三年発表の *The Custom of the Country*
(3) 一九二〇年発表の *The Age of Innocence*

の三篇で、これによつて作者はニューヨークのブルジョア社会の変遷の三つの時期をそれぞれ跡づけている。扱われている時代の順序から見ると第三の小説 *Innocence* はピューリッサー賞 (Pulitzer Prize) 受賞の対象となりアメリカ小説の古典の一つとして今日もなお読まれているもので、その第一章の初めに明記されているように一八七〇年代の初期を記録したものである。十七世紀以来の植民政策によつて富を蓄積しニューヨークに定着した所謂アメリカの貴族階級とも言ふべき人々が、富とそれに相応しい教養を享受し一見幸福な生活を営んでいるようであるが、それなりに封建的な因習の堅い殻の中で感情を抑制しつつ集団の道德に従つて生きて行かねばならない一個人 Newland Archer の苦悩と諦観の歴史である。 *Innocence* にづく作品は、第一に挙げた *The House of Mirth* で之によつてウォートン夫人は作家としての成長をはじめて世に認めら

れたといわれている。一八八〇年代のニューヨークの歴史の一端を物語るものである。ウォートン夫人は一八八〇年代の変化について自叙伝 (*Backward Glance*, 1930) の中で次のように回顧している。

The first change came in the 'eighties, with the earliest detachment of big money-makers from the West, soon to be followed by the lords of Pittsburgh. But their infiltration did not greatly affect old manners and customs, since the dearest ambition of the newcomers was to assimilate existing tradition. ③

西部の新興成金がニューヨークに流れ込んで来はしたが、彼等が既成の伝統に同化することに野心的である間は上流社会の砦は安全であつた。しかし新興階級の勢力が増すにつれ、侵入者の数が殖えるにつれて斜陽華族が出て来た。

House は両階級の対立ではなくて両者の結びつきによって生じた犠牲者 Lily Bart の運命の悲歌である。読者の前に初めて姿を表す Lily は二十九才の未婚の美女で孤児である。父はニューヨークの家柄の人、母は平凡な家庭の出であつたが、母の貪慾は父を駆り立てて事業に手を出させ却つて財産を悉く失わせて了つた。Lily は古いニューヨークと新しいニューヨークの両方であり、両方を理解しつつ両方の間に足を挟まれて倒れても起き上がることが出

来ない。高い教養と洗練された好みをもっているばかりに身を落す勇気がなく、周囲の人々からは理解されず、利用され、誘惑を受け、社交生活を維持するために借金に嵩み結局は物質に救を求めて、彼女は求婚されていたユダヤ人 Rosedale に従う決心をしたときには彼は受け容れてはくれず、止むなく身を落しそれにも堪えきれず自滅の道をえらぶ軽薄で弱い女の性格を作者は一八八〇年代の経済変動の犠牲として書いている。

次の時代一八九〇年代になつて新興成金が妻子を引き連れて陸続としてニューヨークに移住して来たことは第二番目の作品 *The Custom* に記録されている。小説のヒロイン Undine Spragg の最初の夫(実は第二番目の夫) Ralph Marvell はニューヨークの旧家の御曹司として伝統的なことに親しみを充分持つていながら若者として新奇なものに心ひかれている。

Ralph sometimes called his mother and grandfather the Aborigines, and likened them to those vanishing denizens of American continent doomed to be rapid extinction with the advance of the invading race.

He was fond of describing Washington Square as the "Reservation," and of prophesying that before long its inhabitants would be exhibited at ethnological shows, pathetically engaged in the exercise of

their primitive industries. ③

祖父や母を原住民といい、あとから入り込んで来た成り上り者を侵入者と呼んでアメリカ大陸の先住民であるアメリカインディアンと移住して来た欧州人との関係になぞらえている。Ralph の家のある Washington Square はインディアンのための特別保留地のようなものとなり、そこで原住民即ちニューヨークの上流階級がどんな原始的な生活を営んでいるかを公開するための特別地区になるだろうと想像して一人で面白がっている。この青年は植民時代の好みを反影させた我が家のオランダ風の邸宅の内部装飾を懐しく肯定しつつも古いしきたりに反撥を感じ現代的であり度いものと望んでいる。

これら三つの小説によってわれわれは一九世紀末期から二〇世紀にむかう三十年間に亘るニューヨークの社交界の年代記をあたえられている。

ウォートン夫人は *The Custom of the Country* によってその表題が示すとおりアメリカの風習一般について語っている。

風俗小説作家がここでは真正面から風俗そのものと取り組んでいる。ニューヨークの上流社会は一九世紀を過ぎて二〇世紀の初め頃まではアメリカ人一般の風習を持っていたというよりむしろヨーロッパの上流階級の生活の形式を踏襲し、或は積極的に模倣していた面もあったであろう事

は、如何にこの頃の良家の息子達が競ってロンドンやパリに遊学し旧大陸を広く旅行したか、如何に娘達は家庭教師についてフランス語の手解きを受けた後、保護者に連れられて欧州の文物に直接触れることによって教養を深めたかという事はウォートン夫人や夫人の師匠であるヘンリー・ジュームズ及彼等の兄弟たち、又両作家の小説の中の良家の子女などにその例は多く見られる。当時この社会に於ては当然西欧的なものに価値が置かれていたのである。而しながら一九世紀末の急速な経済成長の影響が新興成金階級のニューヨーク進出という形をとり、従来の閉鎖的な上流社会の因習による惰性的な生活から、合理的な考え方に従つて、或は個人の感情や意志を活かすために、民主的に事を運ぶためというモラルに移行するのは当然の進化の過程である。

ウォートン夫人はこの小説の中で極端に自己中心な物質主義の Undine Spragg によつて名門の夫を亡ぼし、夫の親戚の家庭をかき乱し、不逞な積極性を以て家族のためではなく自分だけの慾望実現に汲々とする Social climber を示してアメリカ人の風習を諷刺している。

ヒロインの Undine という奇妙な名前は実業家である彼女の父が一人娘の誕生の週に売出した専売特許商品 hair waver に因んでつけた名である。父親はウォール街への「侵入者であり、娘は社交界への侵入者である。当時

「侵入者」で邸宅を構えるだけの余裕がない者はホテル住いでスタートする者が多い。Spragg 家では言い出したら一歩も譲らぬ Undine の主張を容れて社交界への近道として一流ホテルの豪華な数室に住んでいたので、Ralph Marvell が美人の彼女を見染めたとして不思議はない。上流階級では若い男女の交際のきつかけは男の側の近い既婚の婦人―母、姉、叔母―などから女の側の母親に当って令嬢を招待する許可を求めねばならない。母親に代って Undine が「喜んでお受け致します」の返事を認めるにしてもインスクリプション入りの流行色の便箋を使いたいが上流の人はモノグラムさえついていない純白の用箋を使っている。署名の仕方もある主人の名を笠に着たようなタイトルを着けないで極めて平民的で女学生と同じような署名の仕方である。

Undine was fiercely independent and yet passionately imitative. She wanted to surprise every one by her dash and originality, but she could not help modeling on the last person she met....^⑧

Undine は人目をひくことに苦心していたが母のところに来るマッサージ師を社交のコンサルタントとして上流家庭の人々との交際の手引きをしてもらう。招かれて行った Fairfield 家の邸宅も晩餐も Undine には意外な程つましいものであった。彼女は見下げられたくないと思いつつ

も、口を開けば教養のなさを持ち出すようなことだった。

Undine did not even know that there were any pictures to be seen, much less that "people" went to see them; and she had read no new book but "When The Kissing Had to Stop," of which Mrs. Fairfield seemed not to have heard. On the theatre they were equally at odds, for while Undine had seen "Oolaloo" fourteen times, and was 'wild' about Ned Norris in the "The Soda-Water Fountain." she had not heard of the famous Berlin comedians who were performing Shakespeare at the German Theatre, and knew only by name the clever American actress who was trying to give "repertory" plays with a good stock company.^⑨

上流家庭への仲間入りなど到底覚束ない娘であるが、教養ある人々のデリカシーのお蔭で辛うじて恥をかかされる事もなく、場ちがいな感じも持たせられなかった。こうして始められた若い二人の交際は Fairfield 夫人の宅か Spragg 家にかざられて二人だけで外出する事もなく、又車に同乗して娘を送って来ることもなかった。娘が中西部の Apex 市にいた時には自由奔放に振舞い親に相談もせず一人の男と婚約し間もなく友達にその男を譲り次の男と同棲していたこともあったので、ニューヨークの習慣は

彼女にとつては実にじれったいのである。二ヶ月後に Ralph との婚約が整つて指輪が贈られた。Ralph の亡き祖母から伝えられたものであると新聞の社交欄にはそうした事まで報じられる。サファイヤの鑲め方が古風である。しきたりによつてその夜はニューヨークの有力者である祖父の許で祝宴が催される。あとは一族と一緒にオペラ見物。はじめて公衆の前に若い二人は姿を現わす。

二人の結婚式は当然四旬節を終り復活節を迎えた後と考えられていたが、Ralph は許婚者が社交界の芳しくない連中と行き来していることを聞き込んで無邪気な彼女が上流社会に毒されないよう自分が護つてやるべきだと感じて挙式を繰上げる事を主張する。又 Undine の両親は Apex 市で娘が同棲していた Elmer Moffatt もニューヨークに居て、Undine と会っている事を知つたので彼女の旧悪がばれないうちにと式を早める事に同意して復活節を待たずに式をとりはこび、二人はイタリーからパリへと蜜月旅行に出かけて行く。

こうした社交に関して作者自らの観察や体験のデータを細々とならべ、言葉づかいのちがひも、生き生きとしたせりふのやりとりの間に示しつづけ皮肉を混えて成り上り者の考え方と上流社会のしきたりを対比させている。

物質主義の華とも言うべき Undine という美人は社交界でも指折りの権力者を祖父に持つ Marvell との結婚に

よつて社会的地位を得たが、Ralph Marvell は金儲けを職業とする人ではないから Undine のあくことなき虚栄心を満足させてやる事は出来ない。Marvell 家でも又母方の Dagonet 家に於ても青年は将来に備えて長い研鑽の時を持つことになっている。

.. For four or five generations it had been the rule of both houses that a young fellow should go to Columbia or Harvard, read law, and then lapse into more or less cultivated inaction. The only essential was that he should live "like a gentleman" — that is, with a tranquil disdain for mere money-getting, a passive openness to the finer sensations, one or two fixed principles as to the quality of wine, and an archaic probity that had not yet learned to distinguish between private and "Business" honour. ⑥

こういう伝統に従つて彼もハーバートを終えた後更にオックスフォードで法律を研究し帰国後はニューヨークの法律事務所の研究を続けている。嵩んで行く妻の未払の計算書を始末するために慣れない商売にとび込んで四苦八苦しなければならなくなる。

この小説の中で社会評論家としての役目を与えられている Charles Bowen は Ralph の姉の親しい友達として家

族の会合には必らず姿を見せて作者の代弁者として意見を述べている。

Ralph と Undine の子供 Paul のはじめての誕生祝が Ralph の祖父の家で行われる筈であるのに Undine は不良紳士と遊び歩いて約束を忘れ、召使に子供を Dagonet 家に連れて行くよう言い付ける人がないので当の本人も来ない。Ralph は仕事で忙しく遅くなつてかけつけたが、結局は誕生日のお菓子の蠟燭に火は点さぬままで解散になる。この時 Bowen 氏はアメリカの夫婦の在り方を Ralph とその妻に關聯して批判している。

アメリカでは男性が女性を見下しているということが結婚生活に於いての最大の欠陥をなしている。夫は妻に自分の仕事についても充分な理解を得るように努め、妻の判断力にも頼り重要な問題の解決や遂行にも妻の助力を求めるべきである。Ralph の場合は妻の浪費癖が彼を商売に追いやったというが、それは決して悪い事ではなく、男が妻のために一生懸命に働くのは当然の事である。彼が仕事の事を何も妻に言いたくないというのは正常ではない。もつとも Undine のような自己中心な女に仕事の話聞かせても嫌がるだけだろう。彼女はきつと腹を立てるだろう。何故なら夫の仕事の面倒な話を聞かせられるのはアメリカの習慣に反する事だからと。つまり男性は女性に充分関心を持っていないから、男性の仕事に興味をもつように女性に仕向け

る事をしないのだ。自分を犠牲にして妻のために醜態働いているという事は妻に対して無関心でないという事にはならない。女のために奴隷のように働く事はアメリカの古来からの伝統の一つなのだが、今日では信奉していないドグマのために命を献げる人も沢山ある。その上熱心に金儲けをする事が先に立って、その使途を考えるのは後まわしになつてゐる。それで儲けた金の使い方がわからないので結局全財産を妻に使うのだという。更にアメリカとヨーロッパの女性の家庭に於ける位置を次のように比較している。

.... Why does the European woman interest herself so much more in what the men are doing? Because she's so important to them that they make it worth her while! She's not a parenthesis, as she is here — she's in the very middle of the picture. I'm not implying that Ralph isn't interested in his wife—he's a passionate, a pathetic exception. But even he has to conform to an environment where all the romantic values are reversed. Where does the real life of most American men lie? In some woman's drawingroom or in their offices? The answer's obvious. isn't it? The emotional center of gravity's not the same in the two hemispheres. In The effete societies it's love, in our new one it's business. In

America the real *crime passionnel* is a 'big steal'-
there's more excitement in wrecking railways than
homes. ⑥

ヨーロッパでは妻は夫の仕事を理解しているから、夫にとつては妻は大切な存在である。夫は当然妻に報いるだけの努力をする。アメリカでは妻は夫の附加物にすぎないが、ヨーロッパでは妻は重要な場の中心を占めている。責任ある立場に立っていれば、アメリカの女が持つような不満、不安や虚栄的な物慾にとられる事はない。ボウエン氏は両半球の男性の比較を一步すすめて、フランスの男はどこか他家の女性のサロンにひかれるが、アメリカの男は仕事を本命としているから、家庭を破壊するなぞちっぽけな事にかかわりを持たず、むしろ鉄道の破壊のような大きな事に興奮をするのだと云う。妻を喜ばせるために金だ、自動車だ、衣服だと求めるままに与えるのは夫の仕事の邪魔をさせないためのわいろであると。

Bowen 氏を代弁者として語らせるウォートン夫人のアメリカの両性観及それとフランスの両性観との比較は面白いが、代弁者は男性でありながら、女性の在り方についての責任のすべては、男性が女性を扱う扱い方にあるかのように語らせている。それがウォートン夫人のフェミニズムの主張の一部である事は疑えない。而しこの小説でヒロインの全く無軌道で一方的な主張と行動とこうしたウォートン

夫人のフェミニズムが話の筋のこの時点に於てこのように裏がえしに語られている事は実際は甚だ拙いのである。現に Jessup 女史はその著書「アメリカのフェミニストの信念」の中でこの小説について「ヒロインの勝利はアメリカの金でヨーロッパの華族の肩書きを獲得したことで評価出来る」とし、Undine は「先づニューヨークの上流社会に攻勢に出た後、太西洋を越えてフランスの貴族を獲得した」「両大陸の男性を破滅させた」とか「支配した」とか大袈裟な表現を使って述べているが、作者が Bowen 氏に云わせているのは Undine のような身勝手な女性はいく物質主義の制度の所産であつて、Ralph はその被害者で極く稀にしかない例外なのだ。作品の中で Undine をとり巻くすべての人は——所謂遊びの相手としてのとり巻く連をのぞいて——皆彼女を非難している。作者も明らかに憎しみの感情をあらわに込めて書いているにもかかわらず、言葉の上での非難はアメリカの結婚制度を非難しつつ、アメリカの夫は妻に関心を充分持たず家庭生活に対して熱意に欠けているということと夫を非難している事になるので、この場合勝利は Undine のものであるような錯覚を読者に起させる危険が多いにある。純情で誠実で立派な紳士の Ralph は仕事の圧迫に辛うじて堪えているのに、妻は自分の不貞を棚にあげて夫の不実を捏造して離婚を一方的に運んで了つたのである。彼の受ける精神的な打

撃は離婚当時だけで終らず次々とくりかえされて遂に彼を自殺に追いやってしまった。この場合自殺は敗北を意味するのではない。小説の中で彼は主人公ではなく、一時ヒロインの夫であつたが、夫である事は解消されたので小説の世界から消されねばならないのだ。Ralph は決して上流社会の被害者ではない。彼には因習の殻を破る勇氣があつたし、社会悪に毒されようとする女を救う氣持もあつたが、美しい顔に眩惑されて相手の愛を確める術も知らず自分の愛情を価しない相手に押しつけた事が失敗であつた。Ralph の家の伝統のしるしである婚約指輪を勝手に造りなおさせ、愛情のしるしである結婚記念の贈りものの高価な首飾りは離婚の際には返還される筈のものであり、返すように見せかけて実は売払つてそれを旅費にしてパリに戻りフランスの貴族と結婚する。そんな女を相手にしたための失敗である。

「イーディス・ウォートンの二つの生涯」(The Two Lives of Edith Wharton)の著者 Grace Kellog 女史は The Custom が憎しみの氣持を込めて書かれていることを強調し、作品の中で当然作家の好意を得ていない人物やその人物にかかわりのある地名も感じの悪い揶揄するような名前がつけられている事を、上流階級の人名地名と対照的に取り上げて指摘している。しかしウォートン夫人の憎しみは Undine と Undine のもつ傾向に対するもので、

その憎しみはこの小説のここまでの解説では必要以上に過度であるような印象を与える恐れがあるかも知れない。Undine がフランスの貴族との再婚に於て、又離婚に於て如何に家名も伝統も踏みにじつて平氣であつたかを見なければならぬ。

Ralph との離婚後自由の身となった Undine はいつもながら楽天的で美貌の自分にはどんなチャンスでも開けるような氣持でパリに戻つて来た。彼女にとっては三度目のパリ滞在で知人も多くなっているが、之まで彼女がかなり好意を持たれていたのは Mrs. Ralph Marvell としてであつて、離婚者 Mrs. Undine Marvell としては鄭重な扱いを受けられない事がはじめてわかつた。彼女の学校友達で既にフランス人と結婚している Tressac 夫人はアメリカ人はフランスの貴族と結婚すべきではないと教えてくれる。第一フランスの上流の人は宗教上の結婚をしなければならぬ。教会は離婚を認めないから離婚は實際上不可能である。それ故フランスの高い地位の男が離婚した女とただ法的に結婚する事は自分も相手も全く破滅させる事になるから、フランスの、いわゆる友達同志の關係にいる方にはにはわかつてもらえろし又認めてもらうことも出来る。それにフランスの男性は結婚すると徹底的に伝統的な結婚生活を望む。伝統と戦うことをしないどころか、伝統を喜んでいる。と忠告を受けても Undine はフランス人の宗

教性に感心しながらも、先方の事情を理解する努力もなしに只管自分の立場を確立させるために結婚を主張した。フランス人と再婚するとなると **Ralph** との婚姻の無効を法王に証明するためには莫大な金額を出さねばならない。そこで **Undine** は再婚して家庭をなすことにより、子供に家庭と義理の父親の愛情を与える事が出来るという理由も立ち、一方に於ては子供を手許に置くことで彼女の体面を保つことにもなるし、彼女の方が正しく **Ralph** が悪いという事の証拠になると考えるらしい。**Ralph** は母親らしい振舞を一度も見せた事のない **Undine** に息子を渡す気はなく法廷で戦つても息子の安全を守る決心をするが、**Undine** の求めるものは金である事がわかり、金策にさんざん苦勞したあげく **Elmer Moffatt** に助力を依頼してをいたが、自信ありげな彼も約束の期日までは金が這入らず **Ralph** をがっかりさせた。もつと彼に大きな打撃をあたえたのは **Elmer** が自分は **Undine** の最初の夫であつたと告白をした事である。**Ralph** は四年にわたる妻のための心勞と、妻から欺かれどうしであつたということがやつとわかり言いようもない憤り悲しみに混乱し、必要な金も出来ない。ピストル自殺をしてう。この悲劇の結果として子供は父親の莫大な遺産と共に母親の許に送られたので **Undine** は計画どおり **Raymond de Chelles** と結婚する事が出来た。勿論彼の母やその他の縁者の大反対を押し切

つての事である。

貴族との結婚によつて、好むと好まざるとにかかわらず夫の国の国民にならねばならない。交友関係は夫の好みに合せて制限を受けさせられるし、家柄としての偏見や伝統にも合させられるので事毎に干渉を受けねばならない。

Undine の好きな賑やかなパリの生活は結婚後間もなく終りフランスの片田舎の領地にある城に引込んで農地や森林の管理に熱中する夫の側で退屈に暮さねばならない。

大公が死に **Raymond** が襲爵しても収入が増すわけではない。**Undine** にはフランス人の行き方が理解出来ないのだ。家を大切にし、兄弟を助けるために惜しまず金を出さねばならない。必要な金を得るために旧家の由縁ある家宝や屋敷を手放すことは恥辱ではない、とアメリカのやり方をすすめる。彼女にはパリの華やかさだけしか判つていず、その華やかさの中を見派えのする夫を自分の装飾品として一緒に歩くことと、気のおけないアメリカ人の屯しているホテルに出入したり、服飾品を必要以上に買漁る事に生き甲斐を感じていた。息子の教育は家庭教師に委せてしまい、遊び相手は義理の父親と決つて了つた。**Undine** は **Elmer Moffatt** がパリに來たのを知つて訪ねて行つてフランス流になつたつもりで、彼と情交関係をもち度いと誘いかけている。フランスでは結婚は商売の契約みたいなもので、女が目立つようにしなければ他の人と関係をもつ

でも構わないのだ。夫の親類の女の人もそうしているのだからと云う。而し Elmer はアメリカ人らしく、も一度 Undine を自分のものにするのなら正々堂々と結婚しようとする。フランス女になりきったつものの Undine は「私は旧教徒だから駄目なの、フランスでは離婚なんぞしないのです。あんたがもしここにいらっしやるのなら、時々会わせてほしいの」とは言つたものの Elmer は億万長者になつてゐる事、ウォール街は彼が居なくては行きづまる事などを聞いた彼女は未練をすててフランスの貴族を離婚しアメリカ人の Elmer Moffatt と再び結婚した。彼女の肩書きは、

Ms. Elmer Moffatt, Undine Marvell-de Chelles-Moffatt と長たらしいものになつて了つた。家柄を足台にし爵位を得て、次に金を追求しそれで目的に一応達したかのようであるが、彼女の貪慾は飽く事を知らず、夫をけしかけてゐる。彼等の知人の一人が英国駐在の大使に任命された事を知つて「あなたもちよつぱり野心を出してこういう風にやつてごらんなさいよ。あなたなら平っちゃらよ」と億万長者の夫の尻をたたけば、「いや、それだけは駄目駄目、離婚した女は大使夫人にはしないんだから」と竹箠かえしをされている。

出発から一度の弛みもなく上昇の線を一途に辿る Undine の出世の経歴は最初の夫であつた Elmer を四人目の

夫としての結婚で幕切れになるが、上昇線の無限につづく可能性に作者の怒りも憎しみも遣り場にこまり最後には揶揄にかわり冷笑を含めた茶番劇の一場でけりをつけられている。

ウォートン夫人はアメリカの風習とフランスの風習を比較して両方の一九世紀の終りから二〇世紀のはじめの結婚の習俗に光をあててゐるが、アメリカ人の行き方の合理性を認めつつ、個人の自由、個人の主張が勿論民主主義の発達と共に因習を排して容れられつつあることを述べつつも、両性が相寄り相扶けつつなす生活は、愛情は言わずもがな互を尊重しあつてはじめて可能であることをモーラリスとして教えてゐる。

二十世紀の初めはドライサーの Clyde Griffiths やシンクレア、リュウイスの Babbitt 等産業企業体の中や実業界、政界の環境の中で圧迫される人間像が描かれるようになったが、ウォートン夫人は上流階級という社会の中で、内部にあつて階級の風習から脱落する人、抵抗する人、外部から侵入する人とさまざまな人間の姿を書いている。彼女の自叙伝の中の幼時の回顧の一節に

... Fairy stories, even Mother Goose, even Ander-

sen's tales and the Contes de Perrault, still left me inattentive and indifferent, but the domestic dramas of Opympians roused all my creative energy... I felt more at home with the gods and goddesses of Opympus, who behaved so much like the ladies and gentlemen who came to dine, whom I saw riding and driving in the Bois de Boulogne, and about whom I was forever weaving stories of my own. ⑥

お伽話とかアンデルセンの童話などよりはオリンパスの山に住む神々に親近感を持って居たと言うのは、きまつた所に共に集って住んでいる人間の祖先のような神々、即ち集団の中にとらえる劇に興味を抱いていたにちがいない。何気ない彼女の表現の中に風土にはあまり関係なく人間同志が築いている社会の中での個人の在り方、両性の在り方に彼女の深い関心を読みとることが出来る。

ウォートン夫人の師であり親しい友であったヘンリー・ジェームズは彼自身の得意な主題である 'international situation' が *Custom* ⑦の中に扱われているので特に関心をもつて読んだらしい。「駆使できるすばらしい主題を持つていながらそれを大きな主題として扱わないで、ただ事件として扱った後は通り過ぎて了うなんて貴女程すぐれた理解力のある方にわからない筈はないのだが」とウォート

ン夫人に言つた由。彼女はパリの郊外に大邸宅を構えて住み、相当のフランス通である事はヘンリー・ジェームズもよく知っている。数年後に *French Ways and Their Meaning* を出した程である。それで *Custom* のヒロインとフランス貴族の衝突に正面から光をあてて書いたらと惜しんだのである。而し作者の目的は *Undine* という特殊な女性の経歴を書くことであつたから、彼女のあたりかまわず荒しまわつたところを次々と書いただけである。しかし結果に於てはヘンリー・ジェームズの賞讃を勝ち得ている。

I hang on the sequence of the *Custom* with beating heart & such a sense of your craft, your cunning, your devilish resource in the preparation of them. It's done and arch-done, & something to live for if other things fail, ⑧

パリに住み、ロンドンにも別宅を持ち長い年月旅人として故郷を離れて暮しつつ、故郷の人々の物語を編むとは懐旧の情尽きざるものがあつたであらう。まして三度に亘る離婚沙汰を含んだこの小説が作者自身 Edward Wharton 氏との離婚の年に出版されたという皮肉なめぐり合せに定めし複雑な思を持つた事であらう。故郷はうつろう時の流れをのがれるものではないことを彼女は知っていたであらうが、

When I was young it used to seem to me that the group in which I grew up was like an empty vessel into which no new wine would ever again be poured. Now I see that one of its uses lay in preserving a few drops of an old vintage too rare to be savoured by a youthful palate.

時間的にも距離的にも遠く距てて馳せる思いに、若人の口に合わぬ古いうま酒をまだ僅かながらも貯えている故里をなつかしんでいる。

今年はいーディス・ウォートン没後三十周年に当る年である。故人の遺言によつて七月の命日にはエール大学図書館に保管されている彼女の遺言書が開かれた筈である。筆者には未だその遺言の内容を知ることができないが、彼女についてわれわれが今まで知っていることにどのような変更が伝えられるか、どのような新事実が加えられるか、離婚の理由の真相とか、親しかった男性の二三の友人達との関係についての真実とか、彼女自身の評価を多少変えねばならない発表がなされているかも知れない。彼女に関心を持つものの一人として海外からの便りを待っている。而しどのような個人的な報告も彼女の芸術作品の評価を落すものではないことを信じる。彼女は常に完璧をねらつて表現の効果をばかり文章の推敲琢磨を心がけた芸術家であり、風俗小説家としての彼女の占める狭いながらの地歩は

変りないものと筆者は信じる。

- ※1 Wharton, Edith, *The Writing of Fiction*, p. 61
 - 2 Wharton, *A Backward Glance*, p. 6
 - 3 *The Custom of the Country*, pp. 73, 74
 - 4 *Ibid*, p. 19
 - 5 *Ibid*, pp. 37, 38
 - 6 *Ibid*, p. 75
 - 7 *Ibid*, p. 207
 - 8 Jessup, Josephine Lurie, *The Faith of Our Feminists*, p. 28
 - 9 Kellogg, Grace, *The Two Lives of Edith Wharton*, p. 181
 - 10 *A Backward Glance*, p. 33
 - 11 Bell, Millicent, *Edith Wharton and Henry James*, p. 276
 - 12 *Ibid*, p. 280
- 参考書目
- Wharton, Edith, *The House of Mirth*, Scribners, New York, 1905
- Wharton, Edith, *The Custom of the Country*, Scribners, New York, 1913
- Wharton Edith, *The Age of Innocence*, The Modern Library, New York, 1920
- Wharton, Edith, *The Writing of Fiction*, Octagon Books INC., New York, 1924

- Wharton, Edith, *A Backward Glance*, Scribners, 1933
- Lubbock, Percy, *Portrait of Edith Wharton*, Jonathan Cape, London, 1944
- Navius, Blake, *Edith Wharton, A Study of her Fiction*, University of California Press, 1961
- Lyde, Marilyn Jones, *Edith Wharton: Convention and Morality in the Work of a Novelist*, University of Oklahoma Press, 1959
- Auchincloss, Louis, *Edith Wharton*, University of Minnesota Press, 1961
- Howe, Irving, *Edith Wharton*, Prentice-Hall, Inc., N. J. 1962
- Jessup, Josephine Lurie, *The Faith of Our Feminists*, Biblo and Tannen, New York, 1965
- Kerrogg, Grace, *The Two Lives of Edith Wharton*, Appleton-Century, New York, 1965
- Bell, Millicent, *Edith Wharton & Henry James: The Story of Their Friendship*, George Braziller, New York, 1965